

第5講：119 「遠方から子供が」

逸話篇 119「遠方から子供が」に対して、①「子を思う親心」②「待つ」ということ③「遠方から」という3つの観点から考察をしていく。

* * *

①子を思う親心

天理王命は人類の「生みの親」であり「育ての親」でもある。また、その教えを私たちに明かされた教祖を「おやさま」と呼んでいる。天理教の人間観は、この親と子のつながりが基本になっている。親の立場である教祖は、この逸話のように常に子どもの帰りを楽しみに待っている。

他の逸話でも、8「一寸身上に」では、教祖は「よう帰って来たな。待っていたで。」と、お屋敷に来た西田コトを迎えている。また10「えらい遠廻りをして」の逸話では、榊井キクは教祖から「待っていた、待っていた。」と言われている。どちらの話でも初めての参詣だが、教祖は子どもが帰ってくるのを以前から待ちわびていたかのようにして迎えられている。33「国の掛け橋」でも、山本利三郎は「今日か明日かと待っていたのやで。」と言って迎えられた。

神が人類の親であるなら、私たちの生活は、神による壮大な「子育て」のなかにあるとも言えよう。親は常に子どもの成人を待っている。その成長を願っている。そのために、ときには厳しく、ときには優しく接するのは、私たちの子育てと共通する。神は旬刻限が来るのを待って、言い換えれば子どもが理解できるようになるまで待ってから、ようやくその産みの親の真実を明かし、人類の元の親の存在と創造の意図を教えられた。

②「待つ」ということ

「待つ」という言葉には、時間の経過のなかで待つ対象に対して「期待」や「楽しみ」といった意味が含まれている。このことは、前述の「子を思う親心」と通底する。子どもの成長には長い時間を要するのは言うまでもない。また決して簡単なことでもない。じっくりと時間をかけて、そして何よりも成長を楽しみながらなされるものである。壮大な人類の子育てのなかで、神は常に私たちの成人を楽しみに待っておられる。

また、「待つ」と言えば、教祖は「まつりというのは、待つ理であるから、二十六日の日は、朝から他の用は、何もするのやないで。この日は、結構や、結構や、と、をや様の御恩を喜ばして頂いておればよいのやで。」（『逸話篇』59）と言われ、まつりは「待つ理」と教えられる。つまり祭典を「楽しみを持って待つ」という姿勢が問われている。視点を変えていうなら、祭典までの時間の経過のあり方が問われているのではないだろうか？

ところがグローバル化が進む今日、いつでも、どこでも、誰とでもつながる社会になってきた。それと同時に「待たない」あるいは「待たせない」風潮にもなっている。少しでも「早い」ことを目指し、何でもスピード化されている。例えば乗り物などもスピードアップが問われ、旅行などは「早く目的地に着く」ことが重要視されている。

そもそも旅とは、目的地に着くことが目的ではなく、その行き帰りの道中もまた旅の一つだった。今回の逸話でも、主人公の4人が道中で「にをいがけ」をされたという記述が残ってい

る。大阪から大津までは汽車、琵琶湖を小蒸気船で渡って、その後遠州までは歩いて行ったが、道中では十二下りを歌いながら歩いていた。

現代社会がこの逸話の時代のような生活リズムに戻ることはできないが、それでも何か時間をかけるということを考えてもいいのではないだろうか。また、目的に早く達することだけではなく、その目的に向かってどのように時間を過ごすのかという姿勢が問われている。教内におけるさまざまな行事やイベントなども、その開催だけが目的ではなく、それに向かってどのように日々を過ごすのかという点も重要ではないだろうか。「待つ理」のお言葉にはそうしたことも含まれていると感じられる。

③遠方から

この逸話の「遠方」は現在の静岡県（遠州）のこと。旅とえばまだまだ徒歩が中心だった。他の逸話篇のなかでも、遠方から何キロも歩いて参詣した話が少なくない。徒歩では到着するまでの道中でさまざまな出会いもあったのではと想像できる。そしてその出会いからこの道に導かれたり、導いたりした事例も多い。

その一方で、教祖はすでに現代のような状況を予言されている。175「十七人の子供」の逸話は「今は、阿波国と言えは遠いようやが、帰ろうと思えば一夜の間にも、寝ていて帰れるようになる。」と言われている。昨今、移動手段や通信手段が進歩するなかで、かつての「遠方」がそうではなくなってきた。

教祖50年祭の際、ブラジルからの初めての団参は64日かけての船旅だった。海は荒れ、乗客の多くが船酔いで苦しんだ。団長の大竹忠治郎は「あなた方は世話をしてくつもりで乗られたか。お世話させて頂くつもりで乗られたか。（中略）少なくとも道の者は世話をさせて頂くという心、すなわちこの船はひのきしん船といわれるぐらいつとめ切らさして頂くのではないか。」と信者たちを鼓舞し、それ以降、彼らは他の乗客や乗組員にさまざまな世話をした。下船の際「かような団体は初めてです」と船長が団体に賛辞を贈られた。おぢばがえりも着くことだけが目的ではなく、その道中でどのように振る舞うのかということも重要であると示唆している話である。

今日のグローバル社会では、「遠方」とは単なる距離的な遠さだけが問題ではない。とくに経済格差は「距離」をつくる大きな要因の一つである。そしてこの格差は近年、国内だけに限らず世界規模でますます大きくなってきている。先進国である日本と発展途上の国とでは、物価や就職、治安など、さまざまな面で異なっている。そうした「遠方」に住む、あるいはおぢばがえりが困難な人たちに、どのようにこの親の教えを届けるのか、「世界たすけ」を進める上で決して避けられない問題ではないだろうか。

* * *

親神様は子どもの成人を常に待っておられる。子どもが帰ってくるのを心待ちにしておられる。それがまして「遠方から」なら、より待ち遠しいことに違いない。今日、さまざまな事情を抱えつつおぢばがえりをした人たちに対し、教祖はどのようなお言葉を下されるのか分からないが、教祖に代わって、この逸話にあるように、教祖がわざわざ残された「お餅」に表されるような心遣いを忘れないようにしたいと感じる。